様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：３７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２１４６

研究課題名（和文）伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究　―御師廃止から昭和戦前期まで―

研究課題名（英文）An Empirical Research on the Modern History of Tourism to Ise Jingu

研究代表者
平山　昇（HIRAYAMA, Noboru）

九州産業大学・地域共創学部・准教授

研究者番号：２０７０８１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：明治初年の御師制度廃止から昭和戦前期に至るまでの伊勢参宮ツーリズムの動向を、地域社会および鉄道資本の双方の歴史資料から検討した。前者からは、伊勢に来た人々とその地域との相互関係について検討した。後者からは、鉄道会社が伊勢などへの社寺参詣の集客をどのように展開したのかを明らかにした。その結果、近世以来の流れをくむ旧御師たちと、国鉄・私鉄という新しい交通経営組織とは相互に関係をもたないことが見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで外国人向け旅行斡旋を源流として語られがちであった近現代日本の旅行業・ツーリズムの形成史を、近世以来の日本人の社寺参詣の伝統との関連もふまえて捉え直す視座を切り拓くことができた。さらに、研究対象が近接しながらも相互対話が十分でなかった歴史学・民俗学・宗教学の研究者が、「伊勢参宮ツーリズムの近代史」という新たな研究領域を共通フィールドとして集い、学際的アリーナを形成することができた。この研究内容は「お伊勢まいり」という一般にも馴染み深いテーマに関わるが、「日本人は昔からお伊勢まいりをしていた」といった一般的イメージに対して、過渡期としての近代史研究の重要性を提示することができるであろう。

研究成果の概要（英文）：We have made a detailed research on the tourism to Ise Jingu in modern Japan, mainly focusing on the following two actors : the local community of Ise and the railway company(Osaka Electric Tramway Co., Ltd.). By studying various materials related to the former, we somehow clarified how the local community reacted to the guests who visited Ise. By looking at numerous unpubished documents stored in the railway company, we succeeded in revealing how the railway company practiced marketing toward passengers who made a pilgrimage trip to Ise. By making a close analysis off these two groups of results, we concluded that the Onshi, which was abolished in the early years of Meiji, had virtually no direct relation to the pilgrimage tourism developed by the railway company.

研究分野：観光史

キーワード：信仰　観光　伝統　伊勢神宮　鉄道　交通　地域社会　民俗

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究は、伊勢参宮ツーリズムをめぐる研究史上における問題点を、地域資料（後述する岩井田家資料）と鉄道資料を活用した実証研究によって、克服することを目指した。その問題とは以下の２ 点である。

(1)伊勢参宮の近代史の不在 ―御師制度廃止から昭和戦前期にかけて―

〝日本人は昔から旅好きであり、江戸時代にも多くの日本人がお伊勢参りをした〟というのは、学術界のみならず広く社会に浸透している語り方であり、伊勢神宮の参拝が活発であった（活発である）という共通点から近世と現代をストレートに結びつけて捉えるイメージが一般化している。だが、言うまでもなく、神仏分離など種々の制度改革が断行された明治以降に大きな変化を被らずに伊勢参宮が現代まで続いてきたはずはない。とくに重要なのは、近世に全国各地からの参宮旅行のコーディネイターをつとめていた御師が明治初年に廃止されたことである。通説では、御師制度廃止によっていったん伊勢参宮は衰退したが（白幡洋三郎『旅行ノススメ』中公新書、1996）、大正中期から昭和戦時期にかけて、鉄道の発達を背景に、皇室ゆかりの「聖地」（神社＋天皇陵）を参拝する国家神道的なツーリズムがブームとなり、伊勢参宮は戦前におけるピークをむかえたとされる（平山昇『初詣の社会史』東京大学出版会、2015）。だが、その間の時期（明治初年～大正前期）の伊勢参宮の動向については、地域活性化のために伊勢の都市空間の「神都」化をはかった神苑会に注目した研究、参宮客を相手とする伊勢の旅館業の動向を論じた研究が近年なされているが（ジョン・ブリーン『神都物語』吉川弘文館、2015、谷口「近代の伊勢参宮と宇治山田の旅館業」「近代の伊勢参宮と宇治山田の旅館業」『明治聖徳記念学会紀要』50 号、2013年7）、まとまった研究はいまだに現れていない。

(2)日本の旅行業形成史をめぐって ―「喜賓会→JTB」中心史観の相対化の必要性―

(1)と深く関連することであるが、もう一つは、我が国の観光旅行業形成の歴史をめぐる通説的理解が有する問題点である。現在広く定着しているのは、明治後期に欧米人旅行客向けに設立された喜賓会、および、明治末年に設立されたジャパン・ツーリスト・ビューロー（実質的に喜賓会の事業を継承）を現代日本の旅行業のルーツとする捉え方である。同ビューローは昭和戦時期に外国人向け事業の縮小に伴って邦人旅行事業を拡大させ、それが戦後の日本交通公社（JTB）につながるが、そうすると、日本旅行業形成史は、近世以来の御師の伝統がいったんリセットされ、それと直接の関係をもたずに明治後期から欧米人向け旅行業が新しく形成されたことから現代へつながるという構図となる。この構図にしたがうと、近世以前から現代に至るまで日本人が旅の主要な目的の一つとしてきた社寺参詣との関わりが見えなくなってしまうという問題点が生じる。この点については鈴木勇一郎（『おみやげと鉄道』講談社、2013）が、明治末期から伊勢神宮や高野山へ団体参拝を主軸として旅行斡旋業を展開した社史を有する日本旅行に注目すべきという重要な指摘をしている。だが、近世から近代への過渡期（とくに明治期）については、JTB や日本旅行のような今日ではあたり前となった旅行業専業の組織ではとらえきれない「多様な主体」がツーリズム形成に関わっていたことを見逃してはならないだろう。その点に留意したまとまった実証的研究はいまだに無い状況にある。

２．研究の目的

前述のような背景から、本研究は、伊勢参宮ツーリズムの近代史を、歴史学・民俗学・宗教学の手法を総合的に活用して、実証的に明らかにすることを目指した。具体的には、これまで体系的な実証研究がなされてこなかった、明治初年の御師制度廃止から昭和戦前期に至るまでの動向を、地域社会および鉄道資本の双方の歴史資料から検討した。これによって、外国人向け旅行斡旋（喜賓会→JTB）を源流として（近世以前から続く日本人の社寺参詣の伝統との関わり抜きで）語られがちであった近代日本の旅行業形成史・ツーリズム史に、新たな視座を切り拓くことを目指した。

３．研究の方法

上記の目的を念頭において、本研究では、近世に全国規模で参宮ツーリズムのコーディネイターを担っていた御師システムが明治初年に廃止されて以降、伊勢参宮ツーリズムが変容していった具体的な歴史的過程について、以下の 2 つの資料群を主軸として、実証研究を進めた。

(A) 地域社会側の資料 —岩井田家資料の活用—

近代の伊勢参宮ツーリズムに斡旋・誘客の立場から関わった「多様な主体」のうち、まずもって注目すべきは、1872 年の御師制度廃止という大変革後に参宮ツーリズムの立て直しを図った伊勢の地域社会側の動向である。前述の通り、すでに明治期の神苑会や旅館業者について個別論文が出ているが、実は、制度的には廃止されたはずの伊勢の御師が、その後も昭和10 年代に至るまで各地の檀家と関係を維持し続けていたことを示す注目すべき資料群が近年発掘された。岩井田家資料である（濱千代早由美、谷口裕信、櫻井治男『岩井田家未公開資料特別展 館町の御師』皇学館大学文学部櫻井治男研究室、2014 年）。本研究のメンバーである谷口・濱千代・櫻井がこれまで調査・整理を手掛けてきたが、従来の研究で明らかにされてこなかった、近代の伊勢参宮ツーリズムにおける旧御師の役割について知ることができる画期的な資料である。近代文書だけで20,000 点以上という膨大な量で、この資料の分析を通じて近世から近代への過渡期ならではの参宮の実相を明らかにすることを目指した。

(B) 鉄道側の資料

前述したように、旧御師の岩井田家は、昭和10 年代に至るまで全国各地（とくに北関東）の檀家との関係を維持したが、一方で、明治後期以降の参宮ツーリズムで誘客・斡旋の重要な主体として新たに登場するのが、鉄道である。とりわけ近畿日本鉄道（近鉄。戦前は大阪電気軌道〔大軌〕・参宮急行電鉄〔参急〕）は、戦前から現代に至るまで伊勢参宮にかぎらず伊勢・志摩方面の観光を推進してきた中心的存在であり、戦前には皇室ゆか

りの「聖地」としての伊勢神宮への参拝ツーリズムの活性化を図ったことが近年の研究で指摘されているが（前掲平山『初詣の社会史』）、研究の蓄積は不十分である。そこで本研究では、既存研究で断片的にしか参照されてこなかった近鉄本社広報室所蔵の資料群（大軌・参急の社内報など）を集中的に収集・精査した。これらの資料によって鉄道資本の動向を把握したうえで、同時代の(A)の地域側の資料と照らし合わせることで、鉄道資本が旧御師の役割を代替・再編成していく過程、それにともなって、コーディネイターとしての旧御師の従来からの存在意義が変化していく過程といった点を解明することを目指した。

４．研究成果

上記の研究方法によって、本科研では、明治初年の御師制度廃止から昭和戦前期に至るまでの動向を、地域社会および鉄道資本の双方の歴史資料から明らかにし、これによって、近代日本の旅行業形成史・ツーリズム史に、新たな視座を切り拓くことを目指した。それによって以下のような大きな成果を得られた。

まず(A)については、近代文書だけで20,000 点以上という膨大な量にのぼる岩井田家資料について、研究に活用するための基礎作業として目録作成と撮影とを進めた。同時に、この史料群とあわせて、北関東の旧檀家に残された旧御師史料の調査を進め、両者を総合的に検討することで、御師廃絶後に浮上した伊勢参宮の宿泊問題や旧御師と旧檀家との関係性再構築について検討を深めた。なにぶんにも膨大な資料群のため必ずしも当初の研究計画どおりに研究は進められなかったが、それだけに思わぬ発見も多かった。たとえば、旧檀家をめぐる旧御師同士の関係性について、「頒布大麻」と「授与大麻」について具体的に検討することができた。さらに、「災害と信仰」という当初の研究計画にはなかったテーマの重要性が浮上したため、これに関して検討を深めて、首都圏災害史研究会などで研究報告を行うことができた。

一方(B)については、メンバーそれぞれによる収集もそれなりの成果があったが、とくに大きな成果となったのが、近鉄（戦前は大軌・参急）の社内報をはじめとする資料収集である。これによって初詣をはじめとする伊勢などへの社寺参詣の集客マーケティングがどのように展開していたのかをかなり詳細に明らかにできることがみえてきた。

最終年度を締めくくるにあたって、以上(A)(B)の研究成果を総合的に検討すべく、伊勢神宮との関係が深い東京大神宮関係者をゲストとして招いてワークショップを実施した（2020年2月10日）。総括として、上記の通り２つの班それぞれで多くの成果があった一方で、それにもかかわらず、岩井田家資料と鉄道（近鉄）資料の接点がなかなか見えてこないということが確認された。つまり、我々の仮説としては、近世以来の流れをくむ旧御師たちと、国鉄・私鉄という新しい交通経営組織とが接点をもつ過渡期があったのではないかと考えたが、この両者はやはり別個のものであったと明らかになってきたのである。

本研究の仮説は〝空振り〟に終わったわけであるが、これ自体が重要な事実であると認識し、今後の研究の新たな出発点とすべきであると考えたい。たとえば、伊勢参宮にかぎらず多角的な娯楽集客を行っていた鉄道資本の側は、べつだん旧御師のことを意識して活動する必要はなかったのであろう。だが、旧御師側はどうであろうか。伊勢参宮ツーリズムが鉄道資本によって強力に再編成されていく動向に対して無関心・無関係であったとい

うことはあり得ない。今回我々が対象とした資料群からは見いだせなかったが、今後のさらに地域社会の資料調査を進めるなかで、旧御師側から鉄道によるツーリズム形成について何らかのリアクションをした形跡を見出すことができるのではないか。今後の重要な課題としておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 森悟朗	４．巻 34
２．論文標題 北海道の切棒・杭神社についての覚書　―『北海道神社庁誌』を中心に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 滝川国文	６．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田口 祐子	４．巻 18
２．論文標題 七五三の全国的な広がりとスーパーの役割	５．発行年 2019年
３．雑誌名 開智国際大学紀要	６．最初と最後の頁 87～98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.24581/kaichi.18.0_87	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 櫻井治男	４．巻 391
２．論文標題 地域神社の近代を再考するー中央と地方・『神社』と非『神社』の狭間に何を見るか―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 81-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 櫻井治男	４．巻 52
２．論文標題 お宮の合祀と『神社復祀』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 熊楠works	６．最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平山昇	4．巻 94
2．論文標題 近代の社寺参詣をめぐって　―その視角と方法に関する試論―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 交通史研究	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平山昇	4．巻 1132
2．論文標題 「体験」と「気分」の共同体　―20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱千代早由美	4．巻 2
2．論文標題 伊勢をはなれた御師家族の震災経験　　－関東大震災の安否を知らせる書簡から－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 News Letter　伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究―御師廃止から昭	6．最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱千代早由美	4．巻 4
2．論文標題 岩井田家資料『年中行事記草稿』（明治期）」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 皇學館大学研究開発推進センター紀要	6．最初と最後の頁 191-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱千代早由美	4．巻 52
2．論文標題 伊勢音頭再考　民謡の近現代をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 伊勢郷土史草	6．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平山昇	4．巻 838号
2．論文標題 書評　中西聡著『旅文化と物流　近代日本の輸送体系と空間認識』」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 105-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口裕信	4．巻 No.1
2．論文標題 3.御師廃止後の龍大夫と旧配札地域―埼玉県北足立郡を事例として―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 News Letter（伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究―御師廃止から昭和戦前期まで―）	6．最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田口祐子	4．巻 48
2．論文標題 江戸時代以降の髪置・袴着・帯解に関する一考察　－七五三の形成を考える－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 儀礼文化学会紀要	6．最初と最後の頁 124-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口祐子	4．巻 42号
2．論文標題 「キッズビジネス」と七五三	5．発行年 2017年
3．雑誌名 女性と経験	6．最初と最後の頁 16-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 櫻井治男	4．巻 16
2．論文標題 明治末期の神社合併と海辺の「鎮守」ー三重県度会郡南伊勢町「古和浦」の宗教景観ー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 社叢学研究（ NPO（特定非営利活動法人）社叢学会）	6．最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱千代早由美	4．巻 4
2．論文標題 岩井田家資料『年中行事記草稿』（明治期）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 皇學館大学研究開発推進センター紀要	6．最初と最後の頁 191-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 櫻井治男
2．発表標題 ムラ社会における災害の記憶化と支えあい
3．学会等名 日本人間関係学会第60回記念関西地区会研究会（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 平山昇
２．発表標題 近代の社寺参詣をめぐる研究視角について
３．学会等名 第７回交通史学会（第４４回交通史研究）大会　共通論題「１９世紀から２０世紀初頭の交通と旅・観光」
４．発表年 2018年

１．発表者名 濱千代早由美
２．発表標題 御師資料を通してみる師壇関係の変容と消失　―旧伊勢御師資料の多角的活用のための試論―
３．学会等名 講研究会第82回
４．発表年 2018年

１．発表者名 濱千代早由美・谷口裕信
２．発表標題 利根川・渡良瀬川合流地域の自然災害　―旧伊勢御師岩井田家宛の書簡から―
３．学会等名 首都圏形成史研究会第109回例会　シンポジウム「首都圏の災害史研究の現在」
４．発表年 2018年

１．発表者名 平山昇
２．発表標題 「体験」と「気分」の共同体　―20世紀前半の伊勢神宮参拝ツーリズムを事例に―
３．学会等名 ドイツ現代史学会第40回大会シンポジウム「感情史の射程　―日独事例研究から―」
４．発表年 2017年

１．発表者名 平山昇
２．発表標題 昭和戦前・戦時期における「聖地」ツーリズム
３．学会等名 日本宗教学会 第76回学術大会　第11部会「国体明徴運動下の社会と宗教― 昭和10年前後を中心に―」（代表：小島伸之）
４．発表年 2017年

１．発表者名 平山昇
２．発表標題 宗教研究において「実証的研究を行う」 とはいかなることか　―歴史学の立場から―
３．学会等名 「宗教と社会」学会第25回学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 櫻井治男、音羽悟
２．発表標題 海女とアワビと神々への供物～鳥羽志摩の海女文化と神宮の神饌
３．学会等名 生き物文化誌学会第71回例会（伊勢例会）（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 高木博志（編著）、平山昇（「大正・昭和戦前期の伊勢神宮参拝の動向　娯楽とナショナリズムの両側面から」を担当）	４．発行年 2018年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 552（担当頁400-431頁）
３．書名 近代天皇制と社会	

１．著者名 矢内 賢二（編著）、鈴木勇一郎（「鉄道と近代の旅みやげ」を担当）	４．発行年 2019年
２．出版社 新典社	５．総ページ数 208（担当頁140-177頁）
３．書名 明治、このフシギな時代 3 (新典社選書 91)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

News Letter No.1～No.6
https://www.kyusan-u.ac.jp/guide/research/presentation/pdf/nletter/report_1-6.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	谷口　裕信 (TANIGUCHI Hironobu) (10440835)	皇學館大学・文学部・准教授 (34101)	
研究分担者	濱千代　早由美 (HAMACHIYO Sayumi) (60599520)	帝塚山大学・経済学部・非常勤講師 (34601)	
研究分担者	森　悟朗 (MORI Goro) (10445463)	國學院大學北海道短期大学部・国文学科・准教授 (40129)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　勇一郎 (SUZUKI Yuichiro) (50337862)	立教大学・立教学院史資料センター・教育研究コーディネーター (32686)	
研究協力者	櫻井　治男 (SAKURAI Haruo)		
研究協力者	市田　雅崇 (ICHIDA Masataka)		
研究協力者	田口　祐子 (TAGUCHI Yuko)		
研究協力者	谷部　真吾 (YABE Shingo)		
研究協力者	菅沼　明正 (SUGANUMA Akimasa)		